

花伝書別紙口伝

六

秘する花を知る事

一、秘^ひする花^{はな}を知^しること、

秘^ひすれば花^{はな}なり、秘^ひせずば

花^{はな}なるべからずとなり。此^こ

の分^わけ目^めを知^しること、肝^{かん}要^{よう}

の花^{はな}なり。抑^{そもく}一切^{さい}の事^じ諸^{しよ}

道^{だう}芸^{げい}に於^をいて、その家^{いへ}々に

秘^ひ事^じと申^{まう}すは、秘^ひするに依^よ

〔口訳〕

「秘する花」を知る事については、「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」といふのがその根本である。この、何が故に秘すれば花であり、秘しなければ花でないかといふ、その分け目を悟る事が花の肝要事である。一体、あらゆる諸道諸芸に於て、その家々に秘事と称してゐる物のあるのは、それを秘密にしておくことによつて、重大な効用が生ずるものだからである。だから、秘事といふものは、顕はしてしまへば、さう大したものではないのが常である。しかし、その故に、秘事など

りて大用有るが故なり。然
れば、秘事といふ事を、顕
せば、させる事にても無き
ものなり。これを、させる
事にても無しと云ふ人は、
未だ秘事と云ふ事の大用知
らぬが故なり。

といふものは、大したものではないの
だと言ふ人があれば、その人は、未だ
秘事といふものの大なる効用を知らな
いが為であるといふべきである。

先づ、此の花の口伝に於き
ても、たゞ、珍しき花ぞ
と、皆人知るならば、さて
は、珍しき事有るべしと、
思い設けたらん見物衆の前
にては、仮令珍しき事を為
るとも、見手の心に珍しき

先づこの花の口伝に於ても、「花と
は、ただ、珍らしいことである」とい
ふことを、誰人も承知して居るならば、
「さては、何か、珍らしい事を演ずる
であらう」といふ予期を見物人が持つ
こととなり、さうした見物の前では、
たとひ珍らしい事を演じて、見物
の心には、珍らしいとか、意外だとか
いふ感じは起るものではない。見物人
にとつて、花だといふ事がわからない
のが、演者の花になるのである。だか
ら、見物人は、ただ思の外に面白い上
手だとばかり感じて、それが花である

感^{かん}は有^あるべからず。見る人^{ひと}
の為^{ため}、花^{はな}ぞとも知^しらでこ
そ、為^{して}手の花^{はな}には成^なるべけ
れ。されば、見る人^{ひと}は、たゞ
思^{おも}いの外^{ほか}に、面^{おも}白^{しろ}き上手^ずと
ばかり見^みて、これは、花^{はな}
ぞとも知^しらぬが為^{して}手の花^{はな}な

のだといふことさへも知らないで居る
といふのが、演者の花であるわけであ
る。従つて、結局、見物人の心に、思
ひもよらぬ感激を催さしめるやうの手
段が、能の花であるのである。

り。さるほどに、人^{ひと}の心^{こころ}に、
思^{おも}いも寄^よらぬ感^{かん}を催^{もよ}す手^て立^だ
て、これ花^{はな}なり。

例^{たと}へば、弓^{ゆみ}矢^やの道^{みち}の手^て立^だ
にも、名^{めい}将^{しやう}の案^{あん}計^{けい}らいにて、
思^{おも}いの外^{ほか}なる手^て立^だてに、強^{がう}
敵^{てき}にも勝^かつ事^{こと}あり。是^{これ}負^まく

例へば、武道方面のはかりごと^に於
ても、名將の智謀によつて、意想外の
策略をめぐらして強敵にも打勝つ事が
ある。これも、敗れた方から見れば、
敵のめづらしい（意外な）やり方に化
かされて、敗れたのでなくて何であ
らう。そして、これこそ、一切の諸道

る方かたの目めには、珍めづらしき理ことばり
に、化ばかされて、敗やぶらるる
にてはあらずや。これ一切さい
の事じ、諸道芸しよだうげいに於をいて、勝せう
負ぶに勝かつ理ことばりなり。かやうの
手立てだても、事落居ことらつきよして、かゝ
る計はかり事ごとよと知しりぬれば、

芸に於て、勝負に勝を得る根本原理であるのだ。かやうな方術も、其の事が落居した後に、かうした謀であつたのだと知つてしまへば、其後は（これを防ぐことは）容易であるけれども、以前には、未だ知らなかつたために敗れたのである。かやうなわけであるから、秘事として決して人に知らせないものを、一つは、我が家に遺し伝へるのである。

其その後のちは容易たやすけれども、未いま
だ知しらざりつる故ゆゑに負まくる
なり。去さる程ほどに、秘事ひじとて、
一つひとをば我わが家いへに遺のこすなり。
是こゝを以もて知しるべし。たと
へ、顕あらはさずとも、かゝる秘ひ
事じを知しれる人ひとよとも、人ひと

尚、以上の事からして、次の事について、わきまへねばならない。それは、たとひ秘事を秘しかくして他人に知られる事がないとしても、（それだけでは不十分であつて）、左様な秘事を知

には知られまじきなり。人に心こころを知られぬれば、敵人てきじん油断ゆだんせずして、用心ようじんを持てば、却かえて敵かたきに心こころを付つくる相さうなり。敵方てきはう用心ようじんをせぬときは、此方こなたの勝かつ事こと猶ことなほ容易たやすかるべし。人に油断ゆだんをさせて、

つてゐる者であるといふ事すらも、他人には知られてはならないのである。他人に、彼は秘事を知る人間だと知られてしまふと、敵の心に油断がなく、用心を持つやうになり、さうなれば却つて敵に気を付けさせるといふ結果となる。敵方が用心しないで油断してゐる時は、此方の勝つことは極めて容易であらう。敵人に油断をさせて勝を得るといふことは、これ珍しさの理（秘すること）の大なる効用であるではないか。かやうの次第であるから、我家の秘事として、他人に知られないやう

勝かつ事ことを得るは、珍めづしき理ことわりの大用たいようなるにてはあらずや。去さる程ほどに、我が家いへの秘ひ事じとて、人ひとに知しらせぬを以もて、生涯しやうがいの主ぬしになる花はなとす。秘ひすれば花はな、秘ひせねば花はななるべからず。

にすることを以て、生涯散らぬ花の主ぬしとなる根本とするのである。秘すれば花であり、秘せなければ花ではあり得ない。

この段は、秘事といふものの性質・効用等を説いて余す所がない。我國の諸道芸に於て、秘事や秘伝について記したものは相当に夥しいが、秘事の意義をかくまで正確明瞭に道破したものは、私はまだ見た事がない。それほどに、此の段は立派な意見である。

秘伝や秘事は、知つて見れば、何でもないものである。その点も世阿弥は明かに認識してゐて、「秘事といふことをあらはせば、させるこ

とにてもなきものなり」と断言して居る。しかし、その故に、「秘事などはつまらないものだ」といふのは、所謂一を知つて二を知らざる者である。即ち、世阿弥をしていはしむれば、かかる者は、秘事の偉大な効用といふものを認識し得ない浅見者流に過ぎない。秘事は秘することによつてのみその効力を発揮するものであるからである。

何が故に秘する事が大用を生ずるのか。世阿弥は戦場に於ける武将の神謀奇策を以てこれを例証してゐる。敵を打つには謀の密なることを要する。こちらの謀事が敵に知られるならば、敵はこれに対応する

処置に出でるからである。敵の不意を打ち敵の油断を突く所に、勝利の秘策がある。敗れた者が、戦争の終つた後に、敵の謀事を考へれば、大したものではなかつた事はわかるであらうが、それを予知しなかつた所に、敗因がある。この敵をして予知だもさせないでその不意をつくのは、全く「秘する」といふ事がその効を奏したものでなくて何であらう。

能の花に於ても同様である。「花は珍しさである」といふのが秘事である。だが、見物にこれを知られては、見物が何か珍しさのある事を予想する。予想した者の前では、たとへ如何に珍らしく演じても、見る

者は「意外な」といふおどろきを感じない。従つて「珍らしさ」が珍らしくなくなり、花は咲かない。所が、見物が、花とも珍らしいとも何とも知らないで、ただその面白さばかりに氣をとられて、「珍しさが花だ」と気づかぬ所では、真に能の花が咲く。「人の心に思ひもよらぬ感を催す手立」が花である。「思ひもよらぬ」ことは、秘することによつて生れる大なる効力である。

更に世阿弥は進んで、秘事を知らせぬだけでは未だ不十分であるといひ、秘事を持つ人間であるといふ事さへも、他人に知られてはならない

と説く。実に用意周到の言である。敵人をして、名将であり謀士であると思はせるものは、未だ真の名将謀士ではない。如何となれば、それでは敵が油断をしないからである。真の名将謀士は敵に油断させ得る士でなくてはならない。能に於ても同様である。見物を油断させる人間でなくては、真の花を体得した者とはいへない。「思の外なる感を催させる」とは、結局、相手に油断させて、その虚を衝く所からのみ生れるからである。